

1952. 24. 9. 30日

三上義夫氏

論文審査報告

草稿 (修正稿)

~~十数年~~ 尚、<sup>考史</sup> 甲の本<sup>の</sup> 中<sup>の</sup> 考史<sup>の</sup> 研究

設題してゐる著者は、大正12年「文化史上

より欠けた日本の考史」(考史論文1.) によつ

て、日本考史の研究プロセスを示<sup>した</sup> ~~す~~ <sup>その</sup> ~~研究~~ <sup>の</sup> ~~過程~~ <sup>を</sup>

「内理の発明の南の論証」(昭和5年、考史論

文集2.) をはじめ、<sup>考史</sup> ~~その~~ <sup>の</sup> ~~研究~~ <sup>の</sup> ~~過程~~ <sup>を</sup> ~~示~~ <sup>した</sup>

論文と書かされたのであつた、<sup>この</sup> <sup>提出</sup> <sup>の</sup> <sup>主</sup> <sup>論文</sup> <sup>は</sup> ~~その~~ <sup>の</sup> <sup>代</sup> <sup>表</sup> <sup>的</sup> <sup>な</sup> <sup>一</sup> <sup>つ</sup> <sup>の</sup> <sup>作</sup> <sup>品</sup>

~~著者~~ <sup>の</sup> <sup>新</sup> <sup>た</sup> <sup>な</sup> <sup>代</sup> <sup>表</sup> <sup>的</sup> <sup>な</sup> <sup>一</sup> <sup>つ</sup> <sup>の</sup> <sup>作</sup> <sup>品</sup>

一つである。

この論文において扱はれた問題には二つ

ある。第一は南考史の業績と京政

算術との関係ない比較であり、第二は、中国の

古い算術との関係ない比較 <sup>南考史の業績と</sup> <sup>である。</sup> <sup>この</sup> <sup>二</sup> <sup>つ</sup>

の解決

の問題は、<sup>南</sup> <sup>考</sup> <sup>史</sup> <sup>上</sup> <sup>に</sup> <sup>お</sup> <sup>け</sup> <sup>る</sup> <sup>南</sup> <sup>考</sup> <sup>史</sup> <sup>の</sup> <sup>業</sup> <sup>績</sup> <sup>の</sup> <sup>意</sup> <sup>義</sup> <sup>を</sup> <sup>明</sup> <sup>ら</sup> <sup>し</sup> <sup>た</sup> <sup>上</sup> <sup>に</sup> <sup>い</sup> <sup>つ</sup> <sup>つ</sup> <sup>と</sup> <sup>い</sup> <sup>ふ</sup> <sup>事</sup> <sup>を</sup> <sup>は</sup> <sup>さ</sup> <sup>し</sup> <sup>て</sup> <sup>い</sup> <sup>た</sup> <sup>ら</sup> <sup>う</sup>、

日本考史上の <sup>基本</sup> <sup>的</sup> <sup>な</sup> <sup>課</sup> <sup>題</sup> <sup>と</sup> <sup>して</sup> ~~その~~ <sup>の</sup> <sup>内</sup> <sup>容</sup> <sup>の</sup>

いかに <sup>重</sup> <sup>要</sup> <sup>な</sup> <sup>課</sup> <sup>題</sup> <sup>と</sup> <sup>して</sup> <sup>い</sup> <sup>ふ</sup> <sup>事</sup> <sup>を</sup> <sup>し</sup> <sup>て</sup> <sup>い</sup> <sup>た</sup> <sup>ら</sup> <sup>う</sup>。 <sup>しか</sup> <sup>し</sup> <sup>も</sup> <sup>その</sup> <sup>内</sup> <sup>容</sup> <sup>の</sup>

係する <sup>多</sup> <sup>岐</sup> <sup>廣</sup> <sup>汎</sup> <sup>に</sup> <sup>及</sup> <sup>ぶ</sup> <sup>事</sup> <sup>を</sup> <sup>考</sup> <sup>へ</sup> <sup>た</sup> <sup>ら</sup> <sup>う</sup> <sup>の</sup> <sup>に</sup>、 <sup>本</sup> <sup>論</sup>

文においては、~~その~~ <sup>種</sup> <sup>々</sup> <sup>の</sup> <sup>内</sup> <sup>容</sup> <sup>事</sup> <sup>項</sup> <sup>の</sup> <sup>意</sup> <sup>義</sup> <sup>論</sup> <sup>旨</sup>

の概要を述べるに止まり、<sup>細</sup> <sup>か</sup> <sup>し</sup> <sup>い</sup> <sup>る</sup> <sup>事</sup> <sup>や</sup>

とその結論 ~~を~~ <sup>を</sup> <sup>述</sup> <sup>ぶ</sup> <sup>事</sup> <sup>を</sup> <sup>し</sup> <sup>て</sup> <sup>い</sup> <sup>た</sup> <sup>ら</sup> <sup>う</sup> <sup>事</sup> <sup>を</sup> <sup>し</sup> <sup>て</sup> <sup>い</sup> <sup>た</sup> <sup>ら</sup> <sup>う</sup>

の方で、詳しく研究し

など、  
計算は、参考論文(3)-(7)に譲られている

のであ。

また著者は、南孝和と京坂の著者  
(島田尚政、田中兵、等々)の研究

演算術、行列式、相差法、括弧弧術、方陣、  
その方程式論

を、理論、計算法、代数的等、術語を  
の面から比較して、その南の關係を明らかに、  
次でその關係は、どこから来たのか、問題として、

紙口一之をはじめ、京坂諸学者の傳系図  
についての、歴史的・傳記的検討に入り、  
その研究の結論を創造した。

1. 京坂算家の著述と南孝和の著述との関係は、

全然一致したものもあるが、  
ない。

2. 南の著述のみ見ると、京坂の著者から  
見出さなないものが、いくつもある。

3. それで南の著述は、京坂地方から  
得られたものではない。遠く京都府の  
である。

4. 南の著述は京坂地方から得られたが、  
いつ、どの程度まで、どこまで  
これは不明である。

5. 京坂の著者の多くは、南に  
おらず、  
に水準

佳く、著者は中国の古算法(盈朧逐次近似法)と、尚(その他の和算家の)逐次近似法、~~劉徽~~劉徽の円の算法と、尚の求極限法の包の(括弧算法)を比較し、祖暅之の球の算法を明らし、祖暅之の円弧の算法を招差法と推定し、次の指し名を得た。

6 (1) 古い中国(魏、晋、南北朝)における円の球の算法と、尚(その他の和算家の)逐次近似法との間には、親密な類似性がある。尚の和は方程の解によって演段術の一部を伴って上げ、行列式の展開を行ひ、また(混沌招差法)を能き、円弧の算法を構成して来た。この種の算法は——円の球の——不完全な所が、中国で早くから用いられたのである。(球の算法には異い相違がある、行列式や演段術の代数学は、中国で古く試みられた事は無いが)、円の算法についての尚の著述は、ざらとその筋道だけで中国に存在したことは、疑いの出来た事である。

7 (2) 尚の劉徽や祖暅之の算法を知つてから研究を始めるのたゞの証拠は無いが、多分方程の算法は中国と同様に日本でも用いられてゐる、特に尚の時代には招差法も成立したので、劉徽や祖暅之と同様に円弧の算法を導き出した事は、演段術の代表者である。

も含む

ので、~~その~~いはいは中の内理の発明せにぬき  
展南を導く、~~その~~たの~~こと~~である。

(1) 外に南の零約術、率一術、並に前算  
術、中口の算法から来たのである。しか  
し、~~その~~左に述べたこと、この算法に接し  
たのは、~~その~~ある特殊文献を除いては、~~その~~和のこ  
とが、~~その~~またないのである。

かやうな結論に到達~~する~~の~~過程~~に~~ついて~~は、

著者は研究おこなひおいて、~~その~~数学的解釋の  
おいて、~~その~~實に創意の富んか、~~その~~見解を示された~~こと~~は、

例へば、関孝和の括弧の~~概念~~、~~その~~祖暅之の  
球の~~算法~~の~~解釋~~の~~こと~~、~~その~~祖暅之  
の~~（今世紀の後半から16世紀のはじめのころの）~~球の

体積の~~算法~~、~~その~~積分の概念（即ち Cavalieri  
の~~概念~~）を用ひ~~て~~、~~その~~李暉の「九章

算術の草圖説」（1820刊）には、~~その~~詳しい説  
を行なから、~~その~~この積分の~~概念~~、~~その~~一言も述べられていない。

本論文が発表されてから、~~その~~廿七年になる。その~~間~~には  
~~その~~藤原松三郎博士の他の~~著作~~によつて、~~その~~部分的には、~~その~~新~~説~~  
が~~その~~見出され、~~その~~更に深く掘下りされた。

個所も~~その~~なくはない。しかし、~~その~~本論文は、~~その~~わが口~~の~~たぐい

の~~算術~~研究上~~の~~最も偉大な文献の

一つである、~~その~~今日の~~算術~~に至つて、~~その~~少しもその重要性  
を失はないのである。

よつて、~~その~~本論文の著者は、~~その~~23才博士の~~地位~~を  
授けられた~~こと~~に、~~その~~冷嘲を~~その~~加へられた~~こと~~を~~その~~遺憾とする。

の~~大~~といふ~~こと~~は、  
た~~その~~何~~の~~こと~~か~~  
の~~算術~~の~~概念~~を  
いふ。

積分の~~概念~~を~~その~~要する~~こと~~は、  
~~その~~積分~~の~~概念~~を~~  
いふ。

十分の

2.

四理の答明、同如洛証、「東子銘法」、明私五、

主論文

参考文

手稿本

6  
(4)

大塚定内稿の代数総論 (手稿)  
(主として大正元年九月の稿による)

5  
(4)

大塚定内稿の四理 (手稿)  
(第八節の記載は大正元年)  
尚重富 算術と代数学の歴史  
(大正三年夏)

7  
(4)

松田正剛, 算学入門 (手稿) 手稿

田中正利, 算術明解

田中由良と算術の発展 (廿一) 演算術の

発展の歴史 廿二

同其二 算術の発展 算術の発展の歴史

同其三 算一之術 算術の発展 算術の発展

算術の発展の歴史 算術の発展の歴史

算術の発展の歴史

行列式論 (手稿)

3  
(4)

南条重太郎の代数

南条重太郎の代数の正誤 上. 変式の正誤

下. 行列式の正誤

逐次交乗

逐次乗

逐次交乗と大成算経

算術の発展

久留島重太郎の代数の発展の歴史

算術の発展

1

(4) 文化史上の日本の算術の発展

(8) 日本の算術史の研究